

# 日本国民の

## 精神的虚弱化を憂う

篠田 芳明 陸自 69

### 精神的な虚弱化が進む日本社会

大東亜戦争敗戦の結果、主要都市を悉く廢墟とされた日本であるが、人類史上での奇跡とも言われる素晴らしい復興と発展を遂げた。その原動力は日本社会の各分野で戦前の教育を受けた働き盛りの日本人が戦地から復員しリーダーとして活躍したこと、その指導を受けた戦後育ちの団塊世代が優れた労働力となったことである。日本丸がその推進力を継続していれば輝く日本が続いていたであろう。

しかし、古来人間社会には望ましい方向に前進させようとすると不思議な抵抗力が働くように思われる。

我が国は、経済的に少し豊かになつた気の緩みと西欧の真似を得意とする知的文化人の推奨により「ゆとり教育」なる愚策を取り入れた。この日本国民の骨抜き政策が、学生時代に安保反対運動等に現を抜かしていた団塊世代の気質と整合し、我が国民の精神的成長を低下させる上で効果的な逆噴射となつた。

敗戦直後こそGHQによる日本骨抜

き政策(WGIP)が強力に進められた事は確かだが、「ゆとり教育」は日本国民自ら選んで進めた政策で最早占領軍の所為には出来ない。

「正直・勤勉・我慢強さ・勇氣」が日本民族のブランドであり、古来先達者が培つて下さつた精神であるが、このブランドの維持には国民各個人の長年に亘る厳しい日々の鍛錬が必要だ。しかし、「ゆとり」が推奨された事で国民の間に易きに流れる風潮が瞬く間に拡散されることとなり、その効果が着実に利いてきた。

最近立て続けに日本社会を揺るがす大きな不祥事件が新聞紙上を賑わしているが、これらは日本の退潮を明確に示すバロメータとも言え、「ゆとり教育」が相当深く国民の精神に根を下ろした証左であると思う。

例えば戦後70年間に起きた経済的な10大倒産事件だけを取り上げても1 協栄生命保険、2 リーマン・ブラザーズ証券、3 千代田生命保険、4 日本リース、5 タカタ、6 日本航空インターナショナル、7 武富士、8 マイカル、9 クラウン・リーシング、10 日栄ファイナンスが挙げられるが、これらは全て、平成期に入って約10年後から直近の、20年間に起きた大型倒産事件である。

今から約20年前と言えば、戦前に教

育を受けた世代が第一線を退き、戦後生まれが50歳代になって各分野のリーダーになった時期に符合する。私自身もその団塊世代の一人であるが、交代直後の当分の間は先輩が蓄積して下さつた有形無形の資産を食い潰し乍ら凌いで来た。

しかし、先輩の残して下さつた資産の内、最も重要な精神的要素の引き継ぎを受容できなかったことが日本の屋台骨を揺るがす大惨事になっている気がする。その精神的要素の中でも古来日本人社会の隅々まで行き渡つていた「信なくば、立たず」という、簡素であるが重要なこの一言が欠落してしまつたからではないかと思う。

今や世界中でグローバルイズムが大盛況で、金が集まるころには猫も杓子も集まる。それは経済の原則で、宜なるかな」とは思うが、我が日本人もそれに遅れてはならじと古来の格言を忘れ、人間としての恥も外聞も無く利益追求に走り回るようになった。そして、危険がある程度承知しながら限度を超えて、無謀なまでにタガを外してしまふ事例が後を絶たなくなつた。

勿論、それで上手く行くこともあるが、そのような博打がいつまでも続くことは希であらう。会社等の業績が次第に低下し窮地に陥ると益々見境がなくなつてしまふ。更に追い打ちをか

けるのが不正と隠蔽で窮地を逃れようとするからだ。

実名を出して申し訳ないが、三菱重工の度々の不祥事、タカタ、電通、東芝、最近では臍帯血問題、神戸製鋼所、日産自動車、スバル、商工中金など過去の日本社会では聞いたことのないような醜悪な事件が続出している。しかも、これらは日本を代表するような超優良と言われている企業の反社会的の始末だから驚嘆する。

これらの企業には超エリートが掻き集められ、彼等は激しい世界のマーケットの中で生存を掛けた闘いに投入されよう。当然会社トップはより大きな成果を求め社員を叱咤激励するであらうが「そうは問屋が卸さない」の言葉にあるように世の中甘くはなく、失敗もある。この失敗時点での関係者の対応こそが杜運の明暗を分けると言つても過言ではないと思う。

ジャック・レモンが(他の言葉も併せてアレンジした)、

“Failure is neither hurt anyone nor fatal. Real failure is fear the failure.”と述べている。実際、誠心誠意活動した結果の失敗は大抵の場合、決定的なダメージにはならない。しかし、大きな失敗であれば過去挫折を経験したことはないエリートにとっては大変なショックであらう。

戦前の教育を受けて骨の髄までその精神を保持している先輩達はその失敗を我慢強く受け入れ、勇気を奮って次々と対策を打って危機を打開していった。そのようなリーダーが戦後自ら先頭切って活躍するとともに20年位前まで重い荷を担いで我々世代を指導して下さった。その篤い庇護のもとにエリート社員は(そのリーダー達の本当の苦勞が何かを理解せず)指示されるまま馬車馬のように良く働いた。

しかし、20年程前から戦後世代になつて受け継いだ日本古来の氣質を脱ぎ捨て、進歩的リーダーを指すと称し、グローバリズムに感化された結果、日本の社会状況が大きく変質して来たと思う。

最近の優良企業トップの不始末に対する認識も、メディアを通じて見る限り何か他人事のように聞こえる。

私如き凡人が言うのも憚られるが、不祥事を起こした時、多くの会社のトップクラスは雁首を並べ長時間にわたる会議を重ねて責任を分散し、一生懸命仕事をしているパフォーマンスをした上、言い訳に終始する事が多いのではないか。その時間を半分にしてでも現場をよく見るべきだと私は思う。

少し横道にそれるが、この件に関連して思い出されることはかつて北海道室蘭地方を襲った大きな地震があった

時、出光興産の備蓄タンクの上層構造が破損し、ナフサが大量に蒸発して街中にその匂いが充満したことがあった。そして約3日後その揮発ガスに引火して大火災になった。この3日もの時間を浪費せず責任者が直ちに現場に赴きナフサの蒸発を防ぐ処置さえすれば莫大な損害と名門会社ひいては日本の信頼を喪失させなくて済んだのに(現場責任者や上層部は何をしていたのだ!)と憤りを感じたものだ。

しかし、最近打ち続く巨大不祥事を見ればこれなどまだ中程度の事案かも知れない。情けない限りだ。

### 何故戦前世代は凄いか

戦後の団塊世代の一人である私としては以下の論述には口幅つたい気がするが、だからこそ戦前世代の先輩方にとっては遠慮があつて言えないであろうと忖度し、感じるままに申し述べたいと思う。

先ず感じる大きな変化が生じたのは、先輩達が第一線を退いた後を引き継いだ我々世代が厳しい上下関係の世界を若い頃に経験していない事に加え「ゆとり教育」が導入されたことである。

戦前における日本社会で重きを占めたものが国民皆兵制度で、成人男子に義務付けられた軍隊生活である。これ

は実に素晴らしい国民教育であつたと思ふ。この様な視点には、最近の日本学術会議「問題に関わる大先生と称する知識人らの異論反論は当然予想されるが、私は敢えてこれを筆頭に挙げたい。

軍隊では強い兵隊を養成するのが当然である。究極の強い軍隊は上官の命令に従つて如何なる苦境に立ち至つても一糸乱れず行動することである。しかし乍ら、だからと言つて四六時中軍事教練ばかりをやっている訳ではない。軍隊生活は新兵から將軍に至るまで心身・文武・芸術・科学技術を継続的に

錬磨する場でありこれで完成ではなく、国家に不測の事態が生じれば、即時に実動対処出来る精強な組織を育成することに於ける。即ち、一朝有事に備え立派な日本男児を育てることである。

この軍隊生活での特徴は、同世代の若者が朝から晩まで同じ環境で修練し共同生活することであり、重要なポイントは上下関係が明確であることだ。

このため、初心者(下級者)にとつて入隊当初は日々の生活全てが目新しいことばかりで狼狽えることになるが、基礎的な事から順次高度なことへと上級者に懇切丁寧に身をもつて教え

られ、真似をして早く彼等の様に上達しようといふ日々真剣に過ごすことになる。一方、上級者は下級者に生活全般の

指導をすることになるが、指導するために常に上級者としての模範を示す必要がある。下級者の厳しい目線に晒される上級者は本人の能力以上に意地でも頑張らなければならぬ環境に立つことになり自発的な精神的強制力が常時働く。

この自発的な動機付けが非常に重要な味噌と言え、いくら優秀な親や教師でも不可能な教育法となる。また、上下関係は厳格で規律・規則・任務の他、平素の礼儀・礼節の励行は当然のこととされる。

こうして、軍隊生活では下級者も上級者も常時緊張した生活を余儀なくされ、この僅かな努力の積み重ねが、平凡に日々を送っている場合に較べ信じられない程の人間の成長を生じる所以であると思う。

みがかずば 玉も鏡も 何かせむまなびの道も かくこそありけれ(昭憲皇太后御歌 明治9年)

更に付け加えれば、同年代の若者の昼夜を分かたぬ共同生活では、お互いに実の兄弟より深く接するため情報交換が活発に行われ、他人の体験が自分の疑似体験にもなつて身につく知識もより豊富になることだ。

巷では「規律や上下関係の厳しい軍隊では上級者が下級者を苛め、苛酷なことを強制する」との印象を持つ人も

多いようだが、最近日本の新聞紙上を賑わしているような陰湿な苛めなど滅多になかったと思う。

それどころか、大和魂を精神的な基礎とする軍人が弱者を苛めるなど最も恥かしい行為とされてきた。

寧ろ下級者は日々目前で披露される上級者の素晴らしい能力に敬服し、厳しい中にも優しさを示す彼等を慕った。また、上級者は下級者を慈しんでお互いの間に強固な信頼関係が築かれていたと思う。

かく言う私は戦後世代であり、旧軍の実態については類推でしかないが、昨今の日本ではその状態に最も近い環境下の防衛大学校で教育を受けた体験からそのように確信している。

私は戦争を美化するつもりは全くないが、戦前の教育を象徴する帝国陸海軍の各種記録から垣間見られる上下の篤い信頼関係を如実に示す人間集団の結びつきの事実は驚異的だと思ふ。

このような例は枚挙に遑がないが、有名な硫黄島・アツツ島の玉碎、沖繩の激戦などで随所に見られる。

ここでは上下の信頼関係に加え暖かい人情味が発露された例を挙げる。

① 太平洋戦争におけるスラバヤ沖海戦で日本海軍が撃沈した敵の英国艦乗員多数が海面に漂流していた。それを確認した工藤俊作「駆逐艦・雷」艦

長は敵潜水艦が遊弋している危険海域において彼等の救出を命じた。艦長の無謀とも思える行動に乗員は驚嘆したが、「駆逐艦・雷」の乗員数を超える422名の英国兵を整齐と艦上に救出し、翌日オランダの病院船を通してその捕虜全員を送り返した。

② ペリリュー島で中川州男大佐率いる約1万の守備隊は圧倒的な米軍部隊（米軍は2日で日本軍を壊滅できると見積もっていた）と2カ月以上に及ぶ激戦の末玉碎した。原住民の中には日本軍と共に戦うと言う人も居たが、中川守備隊長はその代表者に「馬鹿者！日本帝国軍人が貴様ら土人と共に戦えるか！」と罵って怒らせたが、戦闘開始前に現地住民全員（死者なし）を戦火の巻き添えにさせないよう別の島に避難させる為の血を吐く思いで芝居を演じたのであった。

この例を見ても危険海域において漂流する敵兵の救出や玉碎に至るまで全將兵が指揮官の命令に従って極限状態の中、自己の任務を最後まで全うする帝国陸海軍における部下将兵と上官の信頼関係の深さ、更には無力と化した敵將兵や現地住民に対する人間愛を実証しており、戦前教育成果の極致と見ることが出来る。

私はこのような戦史を紐解く毎にその鬼神をも泣かせるような崇高な姿に

感動し、涙が止まらないと同時に、よくそこまで部下將兵を掌握し絶体絶命の場に至っても上官を信じ、運命を共にするまで戦い抜いた当時の日本人の偉大さに言葉を失う。上下を問わず全將兵が心底お互いを信じ篤い人間愛で結ばれた集団であったからこそこのような崇高な行為になったと思う。

まとめ  
では我々日本人は今後どのようにすれば良いのか？

答えを一言で言えば「国や自分に誇りが持てる人に成長するように国民を鍛えること」だと私は思う。

今後不幸にも他国が日本を襲い、悲惨な現実が目の前で展開されることでもあれば「もっと早く気が付いて、その予防措置を取って国民が自分達で守るべきであった……」と自覚し反省する時が来るかも知れない。

しかし、そうなるからでは取り返しがつかず、全く無意味な反省になるが、巻き込まれないように用心に用心を重ねるべきだ。

戦争を日本自ら起こす事等論外であるが、巻き込まれないように用心に用心を重ねるべきだ。

ではこれから戦前のように国民皆兵制度を復活するべきか？

もし、国民の合意ができて復活できるならばそれが最も望ましい国民教育

になると同時に日本を護る強力な防波堤になるとは思うが、憲法改正さえおぼつかない現状では現実的ではない。そこで、青少年教育制度を新たに整備して2年程度の共同生活で錬磨することは有用であると思う。

最近「親離れ子離れ」出来ない親子が多くなっているようであるが、その甘えが身勝手な人間関係に発展し、各個人や家庭から細やかな幸せを奪い、時には崩壊に至る大きな原因になっている。従って成人年齢までに日本国民としての自覚と誇りを持った自立心を助長することが重要だと思ふ。ここで、日本古来の優れた伝統に則り「心身・順法精神・公共心」を磨けば多くの健全な日本国民を社会に送り出せるのではないかと思ふ。

世はいかに 開けゆくとも いにしへの 國のおきては たがえざらなむ (明治天皇御製 明治45年)

もしそのようなことが実現すれば、何よりも本人にとつてより逞しい精神力・体力・教養を身に着けることで豊かで活発な社会生活を営むことができるであろうし、両親にとつても素晴らしいことだと思ふ。そして、日本は戦前のように国民皆が笑顔絶やさず、犯罪が少なく平穏で活発な社会活動をする素晴らしい日本になると思ふ。

日本社会が平穏であれば邪心を持つ

国が日本を狙おうとしても隙がなければちよつかいを出し難くなるであろうし、不法を犯す者が居れば断固としてこれを排除すれば良いと思う。

歴史上国家・民族は純軍事的な敗北よりも、内部腐敗の極限時に少しの外圧で崩壊することが多い。

このことから日本が内部崩壊しないよう、立派な日本人を育ててゆくことが何より大切な防波堤になると思う。

将に「武田節」にある「人は石垣、人は城」は、不滅の名言であると思う。

平和を欲するなら戦争に備えよ  
(モンテーニュ『随想録』より)

永久に日本が平和な国家民族であり続けることを祈りつつ、この駄文を閉じる。